
あの日の風が吹く頃に

幸野 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の風が吹く頃に

【Nコード】

N2058B

【作者名】

幸野 飛鳥

【あらすじ】

大山中学校に、鳥山沙羅が引っ越してきた。その学校には、校長の娘である伊集院明という少女がいる。そしてあるとき、二人は校長から秘密を知って――？初めての作品に当たりますが、どうぞお楽しみください！！

第一話 転校生

くく序章 転校生くく

ここは、長野県の小さな町。ここには「大山中学校」という学校がある。もちろん、名前のとおり、中学校である。そして、今日ここに転校生がやってくる。

「ふうん、ここ？」転校生は言った。転校生は女子で、髪は長くいつも風のせいではびいている。転校生の名は、鳥山沙羅^{とりやまさら}。東京から3日前、引っ越して来た。彼女は何事にも挑戦する、積極的な子であった。

「何か面白い事が起きそうな予感ね……。ウン、楽しみ！」
そして、沙羅は歩き始めた。大山中学校に向かって……。

くく伊集院明くく

大山中学校のある教室。普通の教室とは全く違う教室があった。そして、毎朝ここにはある女子生徒がいる。今日も、一人女子生徒が大胆に座っていた。

「明様^{めい}、」ある女子生徒が入ってきた。

「今日は、転入生が入れます。名は――鳥山沙羅でございます。」
礼儀正しくその生徒は言った。

「そう。花恋^{かれん}、個人情報は？」

「はい、こちらでございます。」

そう言いながら数枚の書類を明に渡した。

「ふうん……。こういう漢字なの？キレイな感じがして、好きだね。沙羅、ねえ……。」

「そうでございますか。それは良かったですね。明様と同じクラスですよ。」

急に思い出したかのように花恋は言った。

「あつ……。あの、この個人情報を薫様^{かある}にお見せしたら、少々あわてておりました。」

「お父様が……。？」

薫というのは、明の父親である。住民からのあだ名は最強の薫。なぜといえども、彼は、ここ、大山中学校の校長でもあり伊集院グループの社長なのだ。本人によると、社長はパーティなどに出るだけであつて、ヒマなのだそうだ。だから、大山中学校の校長もしている、最強の薫なのだ。

「お父様があわてるなんて、めったにありませんわ。」

明は顔をすぼめた。

「絶対になにか、隠しているわ。きつと。」

「調べましょうか？」花恋はとっさに言った。

「いや、普通にしていればいいわ。その、沙羅の話をいていればいいはずは分かるのだろうし、そんなに気を早めなくてもいいわ。」冷静に明は言った。

「分かりました。——そろそろ、チャイムが鳴ります。ここで私は、失礼します。」そして花恋は去った。

考えたあと、ゆっくりと、明は教室へと歩いていった。

くくく 出会いくくく

「みなさん、今日は転入生がこのクラスに入ります。」

朝、突然先生が言うので、生徒たちはザワザワしていた。しかし、そのクラスにいた明は動揺しなかった。

「では、入ってきなさい。」

先生が言った。

そして、転入生が入ってきた。——もちろん、鳥山沙羅だ。にっこり微笑みながら沙羅は言った。

「はじめまして。鳥山沙羅です。東京都から引っ越してきました。ええっと・・・、ここにきてまだ間もないですから、みなさん、いろいろ教えてください。」

そして生徒はせいだいな拍手を送った。

「では、沙羅さんは藤木^{ふじき}さんの隣に座ってください。一番後ろの席です。」

沙羅は小さく手を上げている女子を見つけた。多分、その人が藤木さんだろう。

「あのう、えっと、私が藤木^{ゆづ}です。藤木優^{ゆう}です。」恥ずかしがり屋なのだろうか、真っ赤になりながら言った。

「よろしく、優！」沙羅は明るく言った。そして一時間目の授業が始まった。

キンコンカンコン・・・。チャイムが鳴った。休み時間の始まりだ。

休み時間が始まったとたん、沙羅の周りには人だかりができて

いた。数日前から1年A組―沙羅のクラス―に転入生が来るというウワサがあつたらしく、他のクラスからも人が来ていた。

「ねえ、東京にいと町で芸能人二あつたりしないの!？」

「有名人にあつたりするう!？」

沙羅は思つた。ここは本当の田舎だと。

「ええ、そんなことは無いよ。だつてほら、そんなことがいつもあつたら、皆引つ越すでしょう?」

「ああー、そうだねー!」と言つていたが、沙羅自身は違ふところを見ていた。

「あら、まだなの?私の(わたくしの)本を返してくれるんじゃないくて?」偉そうに誰かが言つた。

「い、いえ……。その、あと一日いただけましたら、読み終わるので、返すことができるのですが……。」「
どうやら、優が言っているらしい。」

「あたしは今日つていったでしょう!?!だいたい、伊集院図書館から特別に無料で借しているのよ!ああ、信じられないわ!」誰かが叫んだ。その声は教室じゅうに広がった。

「あ……。また始まつたよ……」

「」

誰かが沙羅に

囁いた。

「え?」

確かに沙羅は転校一日目だが、危ない感じがした。

沙羅は突然立ち上がつて叫んだ。

「ねえ。ちよつとヒドいんじゃないの？」問いかけるように言った。

「！？」ああ、『鳥山沙羅』か……。」「叫んだ女子生徒が言った。

「ええ。ところで、あなたは？」

「――メイ。伊集院明。（いじゅういんめい）」

そして、後ろから一人の女子生徒が出てきた。「アンタは今日来た転校生だから仕方ないね――覚えてちょうだい、この辺で『伊集院』の苗字をもつのは、あの、『伊集院グループ』のご家族だってね！そして明様は伊集院グループの社長でこの学校の校長――伊集院薫様。これも覚えておくといいわ――のお嬢さんだってね！」

ニヤニヤ笑いながら明は言った。

「ちよつと自慢に聞こえたら、ごめんなさい。でも、本当に仕方ないのよ。そこだけは許して。」

「分かった、」

沙羅がやつと口を開いた。

「そこは、分かった。でも、どうして優をせめるの？会話聞いていると、どうやら、優が本を返す予定だったのね。だけど、優はまだ読み終わっていない――だから、あなたが怒り出した。ウン、分かるよ。約束を破る人って、イヤだよ。私もそうだよ。だけど、そのことを怒鳴りつける人も、嫌われちゃうんじゃない？」

沙羅は言った。

「おおー！」という歓声が教室に響いた。「そうだそうだ！」「沙羅は――すごい！」「オレたちがいつも言いたいと思っっていることは、そついう事なんだ！」という声が響いた。

「っ……。」「明は悔しそうに言った。そしてこの教室から去った。
「へえ！あんた、すごいねえ！」

後ろから声がした。振り向いてみると、ポニーテールに髪をまとめた女子が肩をポンと叩いていた。

「今日の放課後、屋上にきてくれる？」

沙羅は、足を屋上へ行く階段に進めていた。屋上につくと、もうポニーテールの女子は立って待っていた。

「待たせました？」沙羅は困った表情をしながら言った。

「いいえ！あたしもちょうど、今来たところよ。」「その女子は明るく言った。」「そうそう、自己紹介ね。あたしは、黒木遥くろきはるか！よろしく

で、本題。実は、この学校の生徒はあの明のことが大嫌いなので、あたし、おもったんだけど、明のわがママを直す会みたいなの作ろうって思ったの。でさあ、副会長になつてくれない？さすがに会長の座は譲れないけど……。」「恥ずかしそうに遥が言った。

沙羅は迷った。さっき沙羅が言った事に生徒たちは歓声をあげた。

優を助けた〃名が彼女を攻めたと言う事になる。きつと、明は嫌われているのだろう。やっぱり、ここは協力すべきだろう。

「OK」沙羅は前を向いて言った。

「よかったあ！実は、もう一人会員がいるの。多分、これから来るはずなんだけど……。」「

そして、屋上のドアから女子生徒が入ってきた。

「あの、すみません遅れて！」その女子生徒はめがねをかけ、下のほうで二つに結んでいた。

「私、秋野香奈あきのかなと申します。副生徒会長をしているので、副会長つて、よばれているんです……。よろしくです。」「丁寧に言った。

「じゃあ、明日屋上に集合。OK？」遥は言った。

「了解！」香奈と沙羅は、同時に声を合わせていった。そして「第二回明退治会」は終わった。

くく伊集院会くく

次の日、屋上に行こうとしたら明と目が合った。

「これからどこにいかれました？」明は聞いた。

「屋上へ。あそこの眺めが気に入っちゃって……。」沙羅は慌てながら言った。「見に行ってもいい？」

「いいえ。なぜなら、伊集院会に参加してもらってから。」

「ーじゃあ、友達に言ってもいい？友達と見る予定だったから。」

「

「花恋、言っただけじゃいい。」そして後ろにいた花恋が去った。屋上へ向かい階段の方向へ行った。

「ついて来なさい。」

ゴクつとつばを飲み、沙羅は彼女たちについて行った。

沙羅は緊張していた。もしかしたら、「明退治会」のことがバレてしまったのかも……と考えていた。

「ようこそ、伊集院会へ。」ある教室についた時、明が言った。

そこには細長いテーブルが並べてあり、多くの女子生徒が座っていた。

「これは、私たち、伊集院グループ大山中学校というチームを強めるために行われている会なの。貴方に入ってもらいたい。どう？」沙羅はしばらく黙っていたが、言い始めた。「分からない。今日は、見学させて。それから、数日間ちようだい。考えるから……。」そして明はいいわと答えた。

その日の休み時間は、ずっとその教室にいた。教室の前にあるホワイトボードに「これからの伊集院グループについて」と書かれていた。

彼女たちは未来について熱く語っていた。永遠に続くかと思ったほどだった。

「では、今日の会を終わります。」明の一声で終わった。

「伊集院さん、もう三時間目、とつくにはじまってるよ？」沙

羅は命にささやいた。

「大丈夫。私の会に出席した場合は、遅刻しても許してくれるわ。それと、明って呼んで。」

「・・・という事で、この数式は成り立ちません。X×Yは、15になるため・・・」先生は数学を教えていた。そして、部屋のドアが開いた。沙羅がそこに立っていた。

「沙羅さんですか。」先生は言った。「どうして遅刻を？東京では遅刻も許されるのですか？」先生は厳しく言った。

「まあまあ、山野先生、落ち着いてくださいな。彼女は、伊集院会に出席していたんです。まだ正式な会員にはなっていないませんが。今回は、私から申し出ました。いけません？」明は言った。

「―沙羅さん、これからはこちらと言ってから会に参加してくださいね。早く、席に着きなさい―」先生は悔しそうに言った。

沙羅と明が席に向かっていている間、生徒たちはザワザワしていた。彼らはうわさをしているらしい。そして、沙羅は誰かのうわさが耳に入った。

「スクープ！鳥山沙羅が、『恐ろし』伊集院会に入ったぞお！」

くくく沙羅はスパイ！くくく

「やっぱり？」

いつものように、屋上で行われる明退治会で、沙羅が明に伊集院会について誘われたことを言ったら、真っ先に遙が言った。

「『やっぱり』って？」沙羅が尋ねた。

「そりゃ、わかるでしょ。転校当日いきなり悪口言われたんだから・・・。」

「わ、悪口って、そんなっ・・・。」

「まっ、明にとっては十分な悪口よ。だって、今まであんな事はつきりと人に言われたことがないのよ？そりゃあ、悪口に聞こえ

るでしょ。だから、沙羅を味方につけて色々攻める予定だったんだろうねえ。」「遥は研究者のように言った。」「そうそう、念のために言っておくことがあったんだ。伊集院会の別名、知ってる？『悪魔の会』よ。」「

「あ、悪魔・・・？」沙羅はつぶやいた。

「でも、おかしいよ！だって、あの時、明は先生にちゃんと『まだ沙羅は正式会員じゃない』って言ったんだよ？なのに、どうして伊集院会に入ったって言われるの？」沙羅は反論した。

「答えは簡単ですよ。」「香奈が言った。」「伊集院会に誘われた生徒は強制的に入るんです。だから、伊集院会に見学しに行ったということは、伊集院会に入ったのと同じなんですよ。」「

「で、どうしたらいいと思う？」沙羅はだんだん心配になってきた。

沙羅が心配になったことを察したのか、「大丈夫。やらなきゃいけない事は簡単なことです。入った方がいいと思います。そうすれば、簡単に情報が入りやすくなるから、プロジェクトがうまくいきやすくなります。」「と香奈が言った。いつものようにめがねが光っている。

「そうね。それで、退治会はどうするか、が問題だね。」「遥が香奈と、うなづきながら言った。

「え？どうして？」沙羅が聞いた。

「だって、3人で集まったら怪しまれるでしょう？それに、明のことよ・・・。何を話しているかなんて、簡単に分かってしまう・・・。うーん、どうしたらいいのやら・・・。」「遥が悩んでいたら、

「では、E-mailで連絡をしたらどうでしょう？皆さん、メルアドがありますよね。」「と香奈が続けた。

「うん、いいね！じゃあ、メルアドを・・・。」「

そして彼女たちはメルアドを交換した。

「では、まとめ。沙羅は情報を手に入れたらすぐにメール。で

は、解散！」

そして会は終わった。

「明！」

沙羅は残りの休み時間を聞き込み調査するのに使うことにした。

「なあに、沙羅さん。何か助けが必要なら助けてあげますわ。」

まだ何も知らない明は、モナ・リザの様な笑顔をしながら言った。

「私、伊集院会の正式会員にさせてください。」沙羅は微笑みながら言った。

「まあ！本当？良かったわ……。では、順位を決めましょう。そうですね……。『一年生最大責任者』がいいかもしれませんね。まあ、次回の伊集院会で発表しましょう。」ニコニコ、明は笑って言った。

「ええ。それで、私思ってたんです。何か明の力になりたいと……。そこで、新聞部に頼んで、『伊集院会報告所』というコーナーを作りませんか？そして、全校の人に伊集院会での結果を知ってもらうんです。そうすれば、頼られる会になれると思いませんか？」

「まあ！とても素敵なアイデアね！それを報告書に書いて次回の伊集院会で発表しなさい。とってもいいアイデアの持ち主ね。」明は、ほめてほめまくった。

「ありがとうございます。」沙羅は言った。

その夜、沙羅はこの様なメールを送った。

題名 報告1

とりあえず、正式会員にはなれました。

自分から言うのも恥ずかしいけど、たぶん明のお気に入りになつたと思う。

次回の伊集院会でデビューすることになりました。

会の日に、また報告します。
では。 沙羅

くく伊集院会正式委員くく

「みなさん、今回は皆さんに発表しなければならない事があります。もう気づいた方もいらっしゃるかもしれませんが、新しい仲間がこの会に加わったのです。さあ、自己紹介を。」

明は会が始まったらすぐに、立ち上がって言った。明がそう言うのと、沙羅が立ち上がった。

「はじめまして。鳥山沙羅です。もしかしたら、皆さん私の事をもうご存知かもしれません。はい、転校初日に明と言い争いをした、鳥山沙羅です。」

皆一瞬、ざわざわし始めた。そりやそうだろうな、と沙羅は思った。なぜ、「明様」と言い争いした人が、伊集院会に入るのだろうか？と思つて、当たり前だ。

「皆さん、静せいじゆう粛に。」にこやかな明が言った。「彼女は、『一年最大責任者』になつてもらいます。ですから今の責任者―ええ、貴方よ、結ゆか花―は、新しい『一年副最大責任者』です。よろしいですね？」明が賛成を求めた。

―賛成―賛成―賛成―。全ての会員が賛成した。明は満足そうにその風景を見つめていた。

「―沙羅。―明は、その一言を言つて、座つた。」

「はい。えっと、実はある企画を考えてきたんです。それを今回は紹介しようと思います。」沙羅は緊張しながらも言った。

「まず、私はある調査を学校内で行いました。この会のメンバーではない、約50人に、我らの伊集院会のイメージについてアンケートをとりました。そして、99%の生徒が『伊集院会は正直いつて、コワイ人が集まる会というイメージがある』というイメージだそうです。ここで、ショックを受けないでください。このイメージ

を壊すため、私はこういう企画を考え出しました。名前は『伊集院会報告所』です。この企画は、新聞部に協力してもらって、新聞に報告所のコーナーを作るんです。秘密企画など以外をそこに書き記しておけば、生徒も伊集院会に親しみを持つと思いますか？」沙羅が報告書を読みながら言った。

会員で委員が一斉に拍手しはじめた。

「皆さんは、この企画に賛成しますか？反対するものは、手を上げなさい。」

しかし、誰も手を上げなかった。

未だに立っている沙羅は、嬉しそうに笑っていた。

「あのう、私の親友が新聞部に所属しているんです！その子に協力してくれるように頼んでみますね！」突然、沙羅の向かい側に座っている女子生徒が立ちあがって言った。「もう時間はありませんねーでは、次回の伊集院会では、『伊集院会報告書』についての詳しいことを決めましょう。いいですよね？」副会長が言った。

「ええ、もちろん。」明が言った。「では、次回は来週に。解散！」

皆自分の教室へ帰っていった。でも、沙羅の周りには人だかりができていた。

「あのアイデア、すてきじゃない！」

「いいなあ！だって、あなたが発表してるとき、明さん、にっこり笑ってたもの！」

沙羅はちよつと慌てていた。早く授業に帰って遅れを取り戻したかったからだ。

「沙羅、」誰かが呼んだ。明だった。「行きましょう。授業に遅れてしまいますわ。」

「あ、うん。」

そして二人は走っていった。

「見た？」二人が走った後、生徒一人がつばやいた。

「うん。もう完全に『悪魔女王』の手下って感じじゃん。あ、でも、お気に入り？」もう一人がつぶやいた。

「あゝあ、かわいいそうだねえ、沙羅、だっけ？」

「ねえねえ、その、沙羅のニックネーム考えよう！」

「いいねえ！―天魔は？天使の天と悪魔の魔！二重人格って感じだし！」

そして女子たちは笑いあった。

〵〵重要なこと〵〵

次の日の放課後、沙羅は新聞部の部室へと足を運んでいた。

「失礼します！鳥山沙羅です。今日はちょっと頼みごとがあるんです。お時間をいただいてもよろしいですか？」沙羅は丁寧に聞いた。

「はあ……。ああ、沙羅さんですね！どうぞ、こちらへ！」ある女子生徒がにこにこしながら言った。彼女は沙羅をいすに座らせた。そして女子生徒は向かい側のいすに座った。

「私、北野楓きたのかえでといいます。三年で、新聞部の部長です―」

「沙羅！1年の鳥山沙羅！もしいたら、至急、屋上に来なさい！」

「あら……。？」楓が言った。「どうやら、伊集院が呼びのようね。」

「すみません、なんか用事が終わったら帰ってきますね。」

「いいえ。できませんよ。だって、いつも伊集院の用事は、長引きますから……」

「そ、そうですか……。分かりました。じゃあ私、明日きます。では、失礼しました！」

そうして楓と別れ、屋上へと走っていった。

「沙羅！遅かったわね……」明が言った。

そして沙羅は隣に校長がいることに気がついた。「こ、校長！」
校長の薫はにっこり笑いながら言った。「沙羅君。君の話は明か

らいつも聞いているよ。さて、今日は大事な話をしなければなら
ない。」

「な、なんでしよう？」沙羅は緊張しながらも言った。

「うん……。これは大事な話であって、同時に、秘密の話なの
だ。この話は、明、沙羅君、私、そして君のお母さんだけが知って
いる話だ。」

そして明に顔を向けていった。「明。沙羅君が入ってきたとき、
僕が少々慌てていた理由が、今に分かる。静かに聞いてなさい。」

「その……。君たちは異母兄弟なのだ。」

「え……。？」二人は声をそろえて言った。しばらく沈黙が続い
た。でも、沙羅が、「あ！異母兄弟！聞いた事ある！」という一言
で沈黙は破られた。

「知っているかい？」薫は静かに笑いながら言った。

「はい！知っています。」沙羅は驚いた顔をしながら言った。「
異母兄弟というのは、違う母親を持つのですが、同じ父親を持つ――
苗字も違う場合が多いですが――血はつながっている兄弟の事です。」
沙羅が一生懸命冷静になろうと思いつながら言った。

「ん？ちよつと待つて……。」「明がかしげながら言った。「同
じ父親で、違う母親？ってことは……。？」

そして二人は同時に薫のを見た。

「ああ。」薫は言った。

「僕が、君たちの父親だよ。」

「……校長！父親！？……」

「お父様……。？」明が言った。「お父様が沙羅の父親？理解不可
能ですわ！なぜ今まで言わなかったの？説明して！」明は早口で叫

んだ。

「明、お前は聞いていなかったのかい？僕は最初に、『静かに聞いてなさい』と言ったはずだ。」薫が冷静に答えた。

「—今から、真実を話そう。静かに聞いてくれたまえ。質問は最後に—」

「あれは15年前—僕はまだ21、2ぐらいだった。当時、佐野さの香苗かなえという人に出会ったんだ—彼女はとても美しい人だった。髪が長く、彼女の笑顔は世界を幸せにさせると思った。そして僕が23のときめでたく結婚……。とても嬉くて幸せで、この幸せが永遠に続くと思った。それもそのはず、香苗が妊娠したんだ。5月19日、女の子が誕生……。」

「あつ！」沙羅は思わず言ってしまった。「5月19日、私の誕生日……！」

「その通り。沙羅君が生まれたんだ。つまり、君が姉だ。」そして薫は話を続けた。「でも—彼女は君を生んだ時に、亡くなったんだ—」

沙羅は口をあけて黙った。でも小さな声でつぶやいた。「……私のせいですか？」

「いや。誰のせいでもないんだ。神が、そうしたんだ。そうなるのが僕の運命なんだ。そうなんだ……。」

そして数年後、会社員になるために、そして沙羅を育てるためにたくさんのお金が必要だったから、僕は最強と思われる会社に行ったのだ。その社長は女社長だった。そして、彼女は僕のことを気に入ってくれた—明、なんていう名前の女社長だったか、分かるかい？」

明はしばらく考えていたが、答えが出た。「—伊集院—真紀—？」伊集院真紀、明のお母の名前だ。

「ああ。」薫は答えた。「真紀さ。気に入られた僕は、彼女と幸運的に付き合うことになったんだ。そして、めでたく再婚。僕の名

前を伊集院にしたんだ。そして2年後、明が生まれたんだ。そして今は、伊集院株式会社の助けを借りながら、この学校の校長をしている、ということさ。

沙羅君、今明がここの理由、それはスキップなんだ。アメリカで、とても秀才だと、今の学年を飛ばせるんだ。」

沙羅は、話が終わったことがすぐに分かり、薫に質問した。「でも、私の苗字は『鳥山』ですよ？そこが分かりません。」

「―僕を許してくれ。」

「？」

「僕は―真紀と一緒にいる時間がとても楽しくて、いつまでも居たかった。だから、教会の前に君を置いたんだ。『この子の名前は沙羅です。誰が受け取ってください。』って書いたあるカードをかごに入った君の上においてな。そして、鳥山夫婦が君を受け取ってくれたんだ。つまり君は明と異母兄弟であり、捨て子なんだ。」

そう・・・君を拾ってくれた人が鳥山さんだったから、君の苗字も赤ん坊の時に変えたんだ。」

（異母兄弟・・・捨て子・・・私の人生って最低・・・？）沙羅は思った。

「・・・失礼します・・・」沙羅は暗く小さい声で言った。そしてゆっくりと屋上から去って行った。

「これは、誰にも秘密だよ！」薫は最後に叫んだ。

その日の放課後、暗くなった沙羅は母親―では無く、自分を引き取った人に話しかけた。

「今日校長から聞いたよ。私と明って、異母兄弟なんだってね。」

『嘘の母親』が驚いた顔をした。「薫さん、とうとうお話になられたのね・・・。」

「うん。」

「じゃあ、もう私は母親としての立場は無いのか・・・。」

「でもどうして校長の事を知ってるの？」

「あら？」彼女は驚いた様子で言った。「その部分はまだ聞いていないの？」

「―私はあの教会を通る事が多かったの。何度も何度も通ったわ・・。そしてある日の帰り道、教会を通ったとき、小さな赤ん坊がかごの中で眠っていたの。その子の上には、「捨て子の沙羅です。誰か引き取ってください。」って書いてあったわ。とってもかわいかったものだから、引き取ったの。そして家にあなたを連れて帰った。フツツとして、紙の裏を見たの。そしたら電話番号が書いてあったの。そこに電話したら―薫さんが出たってわけ。」

く・くこれからく・く

次の日。

まだ沙羅は暗かった。

「どうしたの？」という声が沙羅の耳に入っても、聞こえなかった。

「沙羅？」彼女には聞き覚えのある声が耳に入った。「鳥山沙羅さん？」

フツと顔を見上げた。そこには遙が不思議そうな顔をして見つめていた。

「え？あつ、遙・・。」沙羅は上を見つめた。

「沙羅、どうしたの？ボーツとして・・？」

「これは、誰にも秘密だよ！」

校長の言葉を思い出した。これは秘密。

「ううん！何でもないよ！」沙羅は明るく振舞った。「っていうか、遙こそどうしたの？」遙をチラッと見て、そして黒板を見た。

「良くぞ聞いてくれました！」遙は自慢げそうに言った。「伊集院会の情報、手に入れたのよ！アンタが活躍するんだって？」

「ああ、伊集院会報告所のこと？」沙羅はちよつと微笑みながら言った。

「ピンポン！それにしても、すごいねえ！ねえねえ、あたしもこつそり手伝つてもいい？」

沙羅は振り返った。遙が手伝つてくれると思うだけで嬉しかった。「――遙は伊集院会に入つてないから、全面的に手伝つてもらうのは、難しいです。しかしながら、『沙羅の事を懂れている生徒』という事にすれば、少々はパスできるでしょう。」突然、香奈の声がした。

「香奈！」沙羅は思わず小さく叫んだ。「久しぶりだねえ……！」

「ええ、そうですね……。お互い、忙しい日々をすごしていましたもの。まあ、例外の人は存在しますが……。」そして3人は笑った。

「え？あたし??」

「で？手伝つてもいい？」遙は話を戻した。

「もちろん！嬉しい！」沙羅は言った。

「沙羅！」突然、昨日屋上で聞いた声が聞こえた。

「じゃっ、またね！」沙羅はつぶやいた。「明！どうしたの？」

「……伊集院会報告所……」

その日の放課後、沙羅は新聞部の部室で部長と話していた。

「へえ。面白い企画ね。」楓が企画書を見ながら言った。

「はい。その、タダでは、とは言いません。何か条件をつけますが……。」

「ん」。その前に、これは週刊？月間？それとも、時々？」

「えっと……。何か報告しなければならぬときに出させていただければと思っているので、時々ですね。」

「OK！」そして楓は部員の方を向いた。「注目！次回から、」

伊集院会報告所』というコーナーを作ることがここに契約されました！という事で、そうだな・・・藤木！これの担当になってくれる？」

沙羅は一瞬耳を疑った。（藤木って、隣に座ってる藤木優？）

「沙羅さん！」優は立っていった。「―あつ、すみません・・・えっ？私が担当？本当ですか？わあ、嬉しい！」

「ホラ、そのことについてよく話しな！」そして楓は去った。

「沙羅さん、えっと・・・自己紹介しなくても、私のことは知ってますよね？」

「もちろん！じゃあ、早速話そうか。」

とりあえず、週刊とか月間じゃないから・・・で、内容は私が書く。それから、優に提出するから、優雅最終チェックをして発表。次回の新聞でデビューできそう？できるだけ早くしたいな。うん、やっぱ次の次にだそうか。様子見ながら、ね。

サイズは最初だから小さくていいよ。それで反響を聞いてから最終的なサイズを決めよう。

―優？聞いている？」

「あつ、ハイ。いや、なんか新聞について詳しいから驚いたの・・・」

「まあね！去年、学校新聞部に入ってたから。じゃあ、失礼！」そしてあつという間に沙羅は帰った。

「・・・すごいですね。」楓が近づいてきたのに気づいて、優が言った。

「うん。すごいスクープになりそうね。」

次の日。

「明！」沙羅はホームルームが始まる前に呼びかけた。

「なにかしら？」明は優雅に言った。

「昨日の放課後、新聞部へ訪問したんです。で、報告所の件、OKでました！しかも、部での担当は藤木優なんです！」

「あら！それはなんとも都合がいいわね。お姉さん」

「明っ！校長が、口にするなって申し上げられたのに！まったく報告しようかな・・・。」

「あぁっ！ゴメン！！」明はあわてていった。そして、沙羅の肩をつかんで自分の口に耳を近づけた。「異母姉妹のことは、いつか言うの？」

「ノーコメ！じゃ、優と話してくるね。」そして沙羅は去った・・・というより、逃げた。

そしてその日、久しぶりに退治会にメールを打った。

題名 報告所の件、何とかOKでした。

皆には、原稿を藤木優（報告所担当）に届けてもらったり、内容チェックを手伝ってもらうかも。

その時は、ヨロシク！

それと・・・。退治会会員に報告したいことアリ！ということで、明日お昼休みに食べながら会を行いたいので、それもヨロシク！

沙羅

・・・正式に活動開始！・・・

「どうしたの？いきなり会を開きたいなんて言って。」

次の日の昼休みの頃、3人が集まったとき遙が言った。

「うん。そろそろ、活動したほうがいいんじゃないかなって思っ
て。」

「活動・・・といいますと、どういう事でしょうか？」副会長が冷静に聞いた。

「明を退治するための活動よ！それで私、提案があるの。
まず、私は明のお気に入りって言うことが利用できるはず。それ

と、報告所も利用できる！

何をするのかって言うと、まあ、簡単に言えばイジメ。もちろん、ターゲットは明。それを、スクープとして報告所に出す。どう考えても明が私を疑う事はないでしょう。メンバーが私一人じゃない限り。それで、どんどん追求していつて・・・というか、追及していくフリをしていくの。そしたら、『なんと、明退治会というのがあった！』とかいうの・・・。その時、私が言うの。『何で気づかなかったの？』って！

それだから、藤木優―あ、報告所担当の子ね―を仲間にするべきだと思う！」

「なるほど。沙羅さんがやったということを理解したら、きっと彼女はショックを受ける―その時がチャンスだ、ということですね。私は、そのアイデアに賛成です。後、優さんを会員にするということも。」香奈はすばやく答えた。

「うん。藤木は、相当明にいじめられてると言う事は、何回も聞いたからすぐに入ってくれるね。私も賛成！」と遥も賛成した。

「よし！そしたら今日の放課後、優に話してみる。きっと、OKしてくれると思う！じゃあ、解散！」

「優！それと、楓さんも！」その日の放課後、沙羅は本当に新聞部へ訪れた。

「ああ、沙羅じゃない！どうしたの？」楓が言った。

「ちよつと相談事。あ、優も必要！」

そして3人は楓の机に近づいた。

「どうしたのですか？」

「うん。これは、秘密の話だから、誰にも話さないでね。

実は・・・私と、黒木遥って言う人と、副生徒会長は、『伊集院明退治会』って言う会を作ったの。それはその名の通り、明を退治するためある会なんだけど・・・。実は、私たち、ある作戦を立てたの。それは、うちらが明のこといじめるの。でも、彼女は私の

事を強く信賴しているはずだから、私の事は疑われないはず。で、それを報告所に提出して、スクープにする！で、どんどん追求していく・・・フリをして、最終的には私たちがやったのよ！みたいな事言うつて事になってるの。それで、もちろん明本人にバレたら終わりだからメンバーは少なめにしようつてことになってるんだけど・・・。二人とも、入ってくれない？」

優の顔が笑顔に変わり始めた。

「入らしてください！」優と楓が同時に言った。

「決定！うんと、ハイ、E-mail。で・・・そうだな、明日の昼休み、屋上に集合！」

「・・・作戦は・・・」

メンバーは五人になった。

「それじゃあ・・・作戦開始と行きますか？」沙羅が言った。

「オー！」

「で、今回は、あれ、ですね？」副会長が切り出した。

「うん。」沙羅は言った。「作戦を練ろう！」

「ん、やっぱりつぶすためには、弱点をつくべきじゃない？」

楓が言った。

「弱点、弱点・・・？あつ！」優が叫んだ。

「明は、『名誉命』って感じじゃないですか。そこで・・・泥棒・・・なんていうのは・・・？」

「！！なるほど、じゃあ、こんな感じ？」

『伊集院明（1年）の秘密発覚！伊集院一家の収入は、校長の収入と伊集院明の泥棒の成果だった！しかし、それは自分のこづかいとし、父親には未だ、バレていなかった！』」沙羅が新聞の見出しを言った。

「それいいねえ！それでいこう！でも・・・決定的な証拠は？」

「それに、報告書でマジメにやっているのは、沙羅だけだとする

と、このスクープは沙羅が入手したものとなり、結果的には不利に思えます！」

「うん……。でも、花恋がやった事だとしたら？花恋の家は明の家の隣って聞いたことあるし。泥棒をしたあと、家に帰っていく所を見てもおかしくないし、自分の家が最初に泥棒にあった、って言っていたことにしても誰も怪しまないと思うな。」

「なるほど！」楓が言った。「やっぱり、『報告所には、明の事をよく知っている人が必要なの！』って言えば、快く入ってくれるだろね……。！」

「……花恋……」

「え？」

「だから、報告所には花恋が必要なの！！明の事、よく知ってるんでしょ？幼馴染だから。そうでしょ？」

次の日の中休みで沙羅は聞いた。

「ええ……。だけど、本当に入っているの？」

「『入っている』んじゃないくて、『必要』なの！」

すると、花恋の顔は笑顔に変わっていった。

「わあ、本当にいいのね？私、報告所ができるって聞いてから、すごく興味があったのよ！楽しそうだなって……。でも、本当に自分が入れるとは夢にも思ってたわ……。！！ありがとう、沙羅！」

握手しながら花恋が言った。

「いいえ、どういたしまして……。！」

（かわいそうに……。これから、うちにひどい目にあうとも知らないで、感謝しちゃってる……。）

「あ、そうそう。報告所は、『いつでも』やめられるから、ネ。」

「まあ！そんなこと言う必要ないわ。私、ゼツタイやめないもの！」

「そう……。」

沙羅は、優しい笑顔で返した。その笑顔には意味が込められているとも知らずに、花恋は「？」という顔をしていた。

「……」部員が正式部員「……」

「……という事で、今日から花恋さんが我等・報告所の一員になりました！」

次の日の放課後、沙羅の声が最初に響き渡った。
でも、皆はもう「意味」を分かっている。

「よろしく願います！」

「この部活では、私がリーダーなの。」

「あつ……。よろしく願います。」

「あ、いいよ。堅苦しい挨拶は。それより、この部活には『仮部員と正式部員があるの。まずは、それを決めましょう。聞くことは2つ。それに素直に答えて。」

「ハイ、何でしょう？」

「あなたがこの部活にいることは、明は知ってるの？」

「いえ……。明日、伝えようと思っていたところです。」

「それはいいね！じゃあ、2つ目。はいかいえだけでいいの。」

——明の事、本当は嫌い？——

「！？」

花恋は驚いた顔を見せた。まあ、当たり前だろう。

「この部活、表では報告所という名前だけど、裏の名前は伊集院退治会という名前なの。この質問にはいと答えたら正式部員になれるけど、いいえと答えたら「仮」部員になるの。——まあ、嫌いか好きかだけでいいよ、今は。」

「……」

「どうする？」

「……明とは、小さいときから幼馴染です。彼女のことなら何

でも知っています。明が私のことを気に入っているということも、
―性格も。―

「・・・そう。」

楓は分かっていた。花恋の、本当の気持ちを―

く・・・花恋の秘密く・・・

今日は、皆朝からザワザワしている。

「何が起きているのかしら？花恋、知ってるかしら？」

明が花恋に聞いた。

「・・・」

花恋は一瞬、考えた。

彼女は、何が起きているのか分かっている。

けど、明ののために言わないことを決めた。

「いえ、知りません。」

「そう。なら、調べてくれるかしら？」

「・・・はい。」

そして、花恋は走っていった。

十分後。

「すみません。何も分かりませんでした。」

「ええっ!？」

優秀な花恋が出した答えに、とても驚いた。

「うーん・・・。どうしましょう。知りたいことは知りたいわ。」

「ご自分でお調べになられたらどうでしょう?『二番目』に簡単

な方法ではないか、と。」

「そうね!」

そう言って、走っていった。

「・・・」

「明さん?どうされました?」

休み時間、伊集院会に来た少女たちが言った。明が、とても暗かったのだ。

「ううん。」

明はやつと聞き取れるほどの声で言った。

「なんでもない。・・・そうだ。私、ちよつと調子が悪いの。今日の会議、花恋に頼むわ。言っておいてくれる？私はとりあえず、屋上に行つてゐるわ。じゃあ。」

そういつて、明は屋上にトボトボ行つた。

「明さん、どうしたんだろう？」

「―記事、読んだのかしら？」

「でしょうね。噂だと、自分で見に行つたんですつてゝ！
ええゝ！という声が広がった。

（なんなの？その記事つて。）

あるめがねのかけた、少女・凜が疑問に思った。

「―花恋さん。トイレ、行ってきてもいいですか？」

凜が花恋に聞いた。「もちろん。」

すると、凜はトイレのある方向には向かわなかった。記事が張られている方向へまっすぐに走つて行つた。

「・・・！」

驚いた。ただ、驚いた。

（『伊集院明一家、収入の一部は明本人による泥棒の成果！』）

「泥棒・・・だなんて・・・」

凜の（学校の内で）尊敬する人は、伊集院明だけだったのだ。

〵〵影響〵〵

凜がトイレから帰つて来ると、ドアが突然開いた音が響いた。

「すみません！」

聞き覚えのある声が響いた。

「遅刻しました―あれ？明は？」

花恋以外は、沙羅を睨み付けていた。

「・・・屋上よ。気分が悪いみたい。」

「え！そんなんですか。えっと―会議、開始しないんですか―？」
皆が黙っていた。

「そうね。あまり話し合うこともないし、どちらかというと沙羅さん、あなたと二人きりで喋りたいわ。いいかしら？」

皆、『きつと記事のことね―』と言い合っていたのが聞こえた。

「えっ―ええ、もちろん。」

「オーケー。では、解散！」

「・・・毎回、あんな感じでいいの？」

皆が完全に居なくなつた教室で、花恋が聞いた。

「うん。とつてもよかった！―私は花恋さんのことを尊敬してる―けれど、花恋さんは明と一緒に、ちよつと憎みが入ってる。そんな雰囲気を保てばいいよ。今回は、明が居なかつたからよかったね。今度、当たり前だけど、明が居るときもあんな感じでヨロシクね。」

「うん。じゃあ、今日の放課後、ネ。」

「こんにちは。」

沙羅が新聞部に入ってきた。

「沙羅、ナイスタイミング！」

楓が叫んだ。そこには、藤木優もいた。

「どした？会議・・・かな？」

「ピンポーン！」

楓がご機嫌で叫んだ。

「ホラ、今日出したでしょ？新聞！アレがこれから、どんな影響を出すかを研究してるのよ。」

「私は―ちよつと怖いです。。。―」

優が言った。

「だって・・・明が復讐しに来る可能性だってあるじゃないですか？」

「あつ、それはないよ。」

花恋が入ってきた。

「だって、明はの情報を手に入れてすぐ屋上に行ったもの。伊集院会をサボってでも。」

「自分の会に参加しなかったって事は、アレが相当影響した、と考えてもいいんじゃないかな？」

「そうね。」

楓が床を見ながら言った。

「ということは、これは良い方向にいつてる！といっても、過言じゃないね。」

沙羅はいった。

「そつか。んじゃあ、解散！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2058b/>

あの日の風が吹く頃に

2011年1月11日15時40分発行